【第44号】2006.10.1発行(7.10合併号)

DRAMA かながわ

≪神奈川県演劇連盟≫ ★横浜市中区福富町西通り52 TEL045-261-4866

神奈川県演劇連盟2006年度総会開かれる

新たな課題に向けて

4月16日（日）神奈川県立青少年センター多目的プラザにて

本年度の神奈川演劇連盟総会は、昨年リニューアルオープンした青少年センター多目的プラザにて、初めての開催となった。

議題の中心となったのは、今年開催された「世界演劇祭2006」の報告。観客数8100名と成功を収めたその成果が、世界演劇祭事務局長団のぼる氏より報告された。

その反面、加盟劇団の事情は劇団員の減少や、劇場運営の変化により会場が確保出来ないなど厳しい状況が報告された。

しかし、横田理事長はじめ理事会メンバーの演劇事情改善のための意欲は強く、今年は大きなイベントこそ無いが、加盟劇団が力を合わせて行う仕事は多い。

（オダヒロユキ）

総会議案書からの抜粋　＜横田理事長「始めに」より＞

（大きな事業が終わって）新しい仲間や創造活動への力を得た者もいる反面、連盟の企画が増え、劇団への負担が増えたと感じる者もいたかもしれない。其々の事業への、劇団からの距離感に、微妙なずれを感じることもありました。本来は、一つ一つの劇団が活性化するのが演劇連盟の役割であるはず。企画が増え、劇団の活動に妨げになるような事は避けなくてはならない。しかし、連盟にしか出来ない事もたくさんあるし、より良い演劇環境を整えるため、連盟がやらなくてはいけない仕事もたくさんある。大きな、仕事が終わった後なだけに、是非連盟の価値は何処にあるのか、何をすべきかを本気で考える機会を何度か作りたいと思います。それは、連盟が出来る事が、決して小さな事ではなく意味ある事が出来ると思うからです。

＜県立青少年センター館長宍戸和夫様ご挨拶＞

アマチュア演劇の普及に御尽力いただき感謝します。当館はリニューアルに際し、客席を座りやすく観やすい構造に改築、約８００席とゆったりしたスペースとしました。演劇資料室も開設し、県演連には演劇研究所とともに運営に協力いただいております。当センターを「アマチュア演劇のメッカ」として名実ともに充実させる為には、県演連との協力関係が不可欠です。ホール、多目的プラザそして演劇資料室のご利用をお待ちしております。

（写真右挨拶者館長）

＜横浜市市民活力推進局文化振興課
鬼木和浩様ご挨拶＞

市民演劇への多大な寄与に感謝します。特にこの年度には、横濱世界演劇祭を成功に導かれましたことは県演連にとっても大きな成果だと思います。

アマチュア演劇のさらなる発展に願っております。

劇団河童座「嗚呼 あっぱれ12人パートⅣ」
構成・演出／横田和弘
5月13日(土)14日　相鉄本多劇場

観客もネットで芝居創りに参加できるという触れ込みに興味を持ち、小雨の中出かけた。

相鉄本多の中央部に長机を囲むようにして十二の椅子、その奥側と手前に観客を入れ事の成り行きを観てもらおうとの趣向、「十二人の怒れる男たち」を想い出す。

冒頭、ガイド役兼衛視？として横田氏が登場、芝居の世界へと客を誘う。この辺なにやら子供の出来具合を心配する親のようでもあり微笑ましい。

そしてドラマは始まるのだが、名陪審員のキャラクター紹介やら審理入りの前提を共有するためのドタバタが約四十分続く。

成程、演出の云うとおり「役者のウロタエ振りと馬鹿馬鹿しさ」を楽しめばいいのだと納得する。

さて、その「即興的造り」からくるウロタエ振りそこから発生される面白さであるが、可成りいいのだ。若い演技者も包み込んだアンサンブルが一定の水準にまでいっている。演出の目配りを強く感じた。

だが、今回の狙いは実は役者の側からの破綻を恐れないエネルギーのぶつかり合いが肝要で（とかってに私は思う）その種の緊張関係がもっと発散されたらと不満も覚えた次第。今後に大いに期待します。

京浜協同劇団　藤井　康雄

劇団葡萄座「あかんぼ頌」
作／アンドレ・ルッサン・山本伸二／演出
5月27日28日　杉田劇場

創立60周年を迎えられた由、まことにおめでとうございます。連綿として、１４４回の公演活動、座員の方々の意気と情熱に、ただただ頭の下がる思いです。

劇団としては3回目の「あかんぼ頌」は、典型的な台詞劇、初日の舞台のせいか、詰まるところもありましたが、緊張感溢れる熱演で、あかんぼ万歳的な楽しさを堪能させていただきました。

世辞ばかりでは劇評になりませんので、忌憚のない感想を述べさせていただきますが、それが意図という部分がありましたら、ご容赦ください。

(1)　台詞劇ゆえに正確に台詞を伝えることが重要、捲し立てる場面で聞き取れないこともあり、会話のテンポももう少し緩急が欲しいと思いました。

(2)　役者が観客と芝居をし過ぎている感があり、会話の相手を逸らさないことも大事かと思います。

(3)　舞台は 50 年前のフランス、衣裳に一工夫を。特にアニー（娘）のスラックス姿は、違和感がありましたが。

(4)　オランプ（妻）のハンカチ芝居、最初は良かったのですが、四六時中ではやはり目障りになりました。

(5)　シンメトリックな舞台装置は安定感があって良いのですが、壁を染めた赤と青の曲面は、リアルな空間の中では落ち着かないのではないでしょうか。

劇団こゆるぎ座　楠田　正宏

G/9-Project『ちょっとした宇宙戦艦 華園』
作・演出／仲尾玲二
6月3日4日　相鉄本多劇場

勇ましい女性たちが乗組員の宇宙戦艦「華園」は、宇宙空間を遭難している客船を救助する。救助した船の船長は華園艦長の知り合いであったが、反逆分子のメンバーになっていた。華園を消すために策略を巡らす船長、客船のＶＩＰ客に頼んで合コンを企画する華園の乗組員たち、客船乗務員から華園の乗組員を志願する女の子、彼らと相対する華園艦長とが織りなす、ときにコメディー、ときに真剣なお話。役のイメージが場面によって変わってしまうので、ストーリーの流れがうまくつかめず混乱してしまったり、会話が舞台上の２～３人の会話になって観客が置き去りにされたような箇所もあった。しかし、セレブをゲットしたい乗組員たちの気持ちは自然な演技で存分に楽しめた。またラストシーンでの艦長の作戦は奇想天外で抱腹絶倒だった。いささか気になった点としては、ハイヒールだったので膝が曲がり、歩く姿が格好悪かったことと（武人らしくない）、所々スモーク発射音がセリフの邪魔になったこと。コックピットのセットは宇宙戦艦「ヤマト」を彷彿とさせるものがあった。しかし、入り口が狭かったせいか、出はけがしにくいように見え、スピード感を損なっていたのが残念だった。また役者の「照れ」がまともにわかってしまう所があり、至近距離で演じることの難しさを感じた。

劇団「横綱チュチュ」大島　泰子

劇団かに座　「ホテル５０１」　作／越川大介・演出／田辺晴通
6月23日～25日　かなっくホール

まず全体の感想として、バランスのよい、まとまりのある作品に仕上がっていたと思います。巧みなストーリー展開に、作りすぎでない、親しみの持てる登場人物たちの個性がうまく溶け合っていました。さらに、キャラクターそれぞれの持ち味を生かした、ほっとするような笑いの芝居が、展開全体をソフトにしており、観ていて心地よく感じられました。

ただ、難を言うと、綺麗にまとまりすぎていたともいえます。開演からラストまで、起伏が極めて少ない。中だるみしているところも多少見られました。全体的にテンポアップが必要です。開演の際のアナウンスは、非常に引き付けられるものではありましたが、誘拐犯二人の登場シーンのインパクトがやや薄く、序盤10分のテンションが上がりきっていない印象だったのも、惜しかったです。

また、見所のひとつである、「誘拐犯」である二人が、徐々に大女優・船越をはじめとする周りの者達のペースにのまれていく過程が、いまひとつはっきりしていなかったのも残念でした。彼女のキャラクターに関しては、もう少し誇張させても良かったのではないでしょうか。

しかし、細かい演出の一つ一つに、思わず噴出してしまう工夫がされており、全体を通して、観客をよく意識した舞台でした。面白かったです。

劇団河童座　飯島　絵美

劇団麦の会「温泉旅館ゆけむりの里」
作・演出／山口雄大
6月24日25日　関内ホール小ホール

「こういうお芝居は劇評の書きようもない」と言えばつまらなかったのかなと思われるむきが多々あると紙面のむこうに感じてしまうが、どうしてどうしてよしよしである。花道がいい、できれば関内小ホールに花道を常設してはどうか。芝居のもつ勢いとはこのように活力のあるわきあいあいの舞台空間を言うのだろう。温泉旅館を守ろうとする仲居・おかみ軍団と高級リゾート会社「越後屋」の立ち退きをめぐる筋を中心に、秋田出身の新人仲居モミジの兄（あに）さん捜しをサビにして最後はめでたしめでたしとなる、芝居の筋からすればあまり中身の濃いものではないが、何故か「番頭はんと丁稚どん」のテレビを一所懸命に見ていた自分を思いだしていた。娯楽が今の時代より少なかったが笑いは茶の間にあふれかえっていた。

日本人の面白さを感じる原点はこのようにのんびりとして暖かい雰囲気の中にひとつはあると思う。是非大事にしてもらいたい、

来年もやって欲しいと感じた。

劇団蒼い群　村田　次郎

京浜協同劇団「雨やどり」

作／相澤史郎・演出／瀬谷やほこ
7月1日2日7日8日
スペース京浜

第一部の昔語りでは、舞台に静かに建つ古い薬師神社の前で「ほんとの話」「大根きざみ」の２編が北方弁で語られた。その響きは温かく、そして柔らかく心をつかみ、観客は語り部の呼吸にあわせ、ハッとしたりクスリと笑いをもらしたりして、空間に流れる時間がすべて一緒になった様な感覚を覚えた。第二部の「雨やどり」も、温もりあるふるさと言葉に包まれていた。法事帰りの婆さま、突然の雨で飛び込んできた女性、人形を自分の娘と信じて抱く老女、人のよい西瓜売り。薬師神社には、生きた人間も死んだ者たちも、自然にみんなが集まってくる。雨が降れば雨宿りし、人生に疲れれば守ってくれるもののそばで眠る、そんな当たり前の場所を、時間に追われて立ちどまろうとしない現代人は持っていないし、または気付かず素通りして毎日を過ごしている。薬師神社の中で、入っておいで、と優しく皆を招き入れる婆さまの茶目っ気あふれる仕草とふるさと言葉に、心の奥がじんわり温かくなった。幸せな気持ちで劇場を出ると、行きには今にも降りだしそうだった頭上には青空がのぞいていた。まさに素敵な雨やどりだった。

劇団葡萄座／西川　絵菜

横浜小劇場「聖家族」

作／神宮茂十郎・演出／高安誠吾
7月15日～16日
関内ホール小ホール

短い芝居というので直ぐ核心に入るだろうと予想していた。板付きは足を捻挫した老婦人と女性歯科医、そこで義歯が渡される。

それから老婦人の娘や孫が帰宅し、お喋りの中で自分の意志を語らない。下のハコ〈交番〉から女性警官が見廻りにきて話に加わるが、勧められた酒で酔っぱらって…という具合に芝居は進行するのだが…。そこで専ら語られるのは、老婦人の娘も孫も〈処女懐胎〉で出生し、警官の家は先々代から全員が警官であるという異常な生態であった。片や〈純粋女系〉、片や〈警官純血〉という偏執はどうして生まれたのだろう…。〈関係との断絶〉→〈関係がもたらす不安からの逃亡〉、そういう心理を暗示しているようだ。

ラストに女医が男を屋上から突き落として殺す。連行され刑務所の〈ハコ〉に閉じこめられる女医に向かって、老婦人は“あなたは生きている”と励ます。この不安の時代を生きるには、外との関係を断って自分の〈ハコ〉に閉じ篭もること、即ち〈自閉〉が最後の手段なのだと訴えかけているように感じた。だが、そういうことでいいのだろうか…。

出演者たちの真摯さには好感を懐いたが、芝居の志向性には疑問が残った。

個人会員　高津　一郎

劇団蒼生樹『ニューパラダイスタウン』

作／大橋泰彦・演出／濱田重行
7月15日～17日
横浜市教育文化ホール

緑に囲まれ空気の美味しい場所に開発された庭付き一戸建てが立ち並ぶニュータウン。それは現代に疲れた人々の憧れの場所であった筈。ところが住民が数年後に経験することになるのは、バブルが弾け、二階に上がって梯子を外された状況。目先が利くものは次々と去り、残され追い詰められ数少なくなった住民が、最後にとった行動は・・・・社会性のある事柄を題材に、些少なことを笑い飛ばしながら本質に迫ろうとする作品。

喜劇だからということで、観客の受けを狙って、観客向けに所謂「お芝居」をする舞台が昨今蔓延していて、観るほうが白けることがあるものだが、蒼生樹のこの舞台は大仰な演技も心から面白く、次回公演が８回となるという成熟した劇団の余裕が感じられた。出演者全員が舞台上で自由であるということは、劇団員の新陳代謝を考えるとき、どのような稽古がなされているのか、羨ましくも思えた。

ただ、本質に迫ろうという点で、火事を見る住民の場面に物足りなさを感じたのは私だけであったろうか？　笑ってお終いにするだけではない芝居を見せうる力量のある劇団であるだけにもったいない。

全体の出来として素晴らしかっただけに、ちょっと気になったことは、開幕前から皺のある白幕に演目が投影されていたこと。寂れた「ニューパラダイスタウン」を象徴しているようで、敢えて意図されたのか？　そうでないなら、これがプロローグの良く出来たVIDEOのパラダイス大宣伝に繋がるだけに、寂れていてはどうか？　観客は芝居が始まるまで十数分これと向き合っていたのです。

（観劇／7月16日14時）

劇団きさく座　西山慈恩

劇団ひこばえ「眺める」

作／・演出／井上　学
8月20日(日)
神奈川県立青少年センター多目的プラザ

当初の演目を変更しての公演と聞いた。しかも稽古期間は約10日間とか・・・我と比べて信じられない面持ちである。

不幸な出来事（妊娠・出産・子の死亡）から関係がねじれてしまった男女の物語。お互いの心の中を写しだすかのような猫（国語が分かる、猫語も分かる）は不幸な出来事の化身か？　訪れてくる男の差し入れはいつも食パンのみ。その真意は？　どうしても推理できなかった。行き場のない心はさまよい、苛立ち、すれちがいの連続。

冒頭のシーンで２組の男女が映し出された。中央の高見には黒ずくめの親密な男女、もう一組がかの男女。芝居の進行につれ、幾度となく黒ずくめの男女は現れ、猫とも交流する姿は、心の中の距離と関係を示しているようだった。

ラストシーンでは心のわだかまりが消失し、猫は見えなくなった。若い作者が自ら出演、全員台詞も詰まるところなく、とても２週間弱で仕上げたとは思えないスムースな展開だったが、願わくばこうした急仕上げでなく、じっくりと取り組んだ作品に触れてみたかった。

劇団麦の会　山元　洋一

劇団河童座「嗚呼あっぱれ12人Ⅳ」番外編

作・演出／横田和弘
9月16日(土)～17日(日)
横須賀市立青少年会館

舞台を会場の真ん中につくり、観客はいろいろな角度からお芝居をみれるといった会場造りがしてあった。話は、横田さん(演出)の簡単な注意事項の説明から始まり、それに続いて役者たちが、話に合わせながら入ってくる、というような形で、１ベルといったお客様に見るという準備を意識させずに物語は始まった。内容は。これから日本でも導入される陪審員制度のお話。横須賀でおこった事件の犯人が、無罪であるか、有罪であるかを審議し、１２人の陪審員全員の意見が合うまで会議をするというもの。最初は、全員が有罪を主張していたが、いつの間にか無罪を主張するものが現れ、そこから意見がわかれ、事件を再現したりすることで、最後は全員が無罪の結論を出すというものだった。セリフともアドリブともとれる役者たちのやりとりに、楽しんでいる観客もいた。全て打ち合わせのもとに行なっているものだとは思うが、私からみると、もう少し統制のとれたやり方で話を進めて欲しかったと思う。『１２人の…』というお話は、いろいろなところで脚色され、他でも何度かみたことがある。横須賀ならではの特色をだしてもらえれば、もっと楽しめるものになったのではないかと思う。

劇団蒼生樹　三木　直史

「演劇資料室」だより No.1
演劇雑誌の貸出をはじめます。

これまで演劇資料室の雑誌は貸出をしておりませんでした。貸出による欠号をおそれるからです。理想的には演劇雑誌は全号揃いで将来に向けて保存されるべきものです。

資料室をご利用される方の多くは戯曲の閲覧が目的ですが、雑誌にだけ掲載されている戯曲は数多くあります。そこでご利用者の利便をはかり、２冊以上ある号については保存、閲覧用の雑誌とは別に「貸出用」の専用書架を設置して雑誌に「貸出用」の表示ラベルの貼ってある雑誌に限り貸出をおこないます。貸出用の冊数をこれからも増加してゆきます。

「雑誌・逐次刊行物目録」（データベース）作成事業開始

「演劇資料室」にある演劇雑誌、各種演劇団体の機関紙などのデータベース作成の仕事をはじめます。

データベース・システムをソフト業者に委嘱していて、テスト版をもとに手直しをして最終版が近日中に完成します。現在、テスト入力作業をやっています。

このデータベースでは雑誌の書誌情報、所在情報だけでなく各号の記事の内容目録を網羅しようという意欲的なものです。

演劇雑誌についての雑誌記事索引は国立国会図書館にもごく部分的なものしかありません

これが完成すれば著者名、記事名をキーワードｄ全体の雑誌のなかから検索、一覧表示が可能になります。これは画期的なことで、わが国初といってもいいと思います。
この事業には入力のための膨大なマンパワーが必要になります。県演連に加盟の劇団員のみなさまのご協力をお願いします。

ご協力いただける方は「演劇資料室」tel 045-263-4400（代表） 荒井、山元まで

「演劇雑誌・図書」の処分をお考えの方へ

お手元の演劇雑誌・図書の処分をお考えでしたら「演劇資料室」への寄贈をお願いでき ないでしょうか。但し、すでに復数冊所蔵しているものについてはお断りさせていただくことがあります。

「演劇資料室」ボランティア（入力作業）募集

演劇資料室には約3000冊の演劇雑誌、各劇団、演劇団体の機関紙（誌）があります。所蔵雑誌類の記事目録（ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ）作成の作業をはじめます。

この仕事の完成には大きなマンパワーが必要です。ご協力をお願いします。

■ 作業の内容：データベース入力作業（ワープロ入力できる方）

作業場所： 演劇資料室　　火曜日～日曜日（月曜休館）9:00～17:00

ご協力いただける方は県立青少年ｾﾝﾀｰ「演劇資料室」tel:045-263-4400(内線)5301
担当：荒井、山元までご連絡ください。

ご協力いただける日時、時間帯で１回（1日）3時間を目途にお願いします。

ローテーションを組み、無駄のない作業をすすめたいと思います。

演劇資料室　荒井　賢一

編集後記に変えて

大変遅れましてご迷惑をおかけしました。前編集長から交代したとたんのこの体たらく、弁解の言葉もありません。

発行を急がないと2号も欠けてしまうということでこの無味乾燥な体裁となりました。

新しい編集メンバーも加わりましたので、これからは定期に、これまでのドラマ神奈川に負けない内容を目指して努力しますので、今少し時間を頂きたいと思います。

これからの編集体制は

編集長　坂下　優一
編集員　浅葉久美子
同　オダヒロユキ
同　山元　洋一
同　和田　幸子

となりました。まだまだ力が必要です。手を挙げてくださるのを待っています。

神奈川県演劇フェスティバル ラインナップ

G／9－Project
「ラッシュアワー」
於：シルクロード舞踏館（中華街）
９月～１２月の間・毎月第３週目

劇団葡萄座
「復刻版★熱海殺人事件」
於：青少年センター多目的プラザ
１０月１４日～１５日

劇団きさく座
「白い家・くちなしの頃」
於：青少年センター多目的プラザ
１０月２１日～２２日

劇団こゆるぎ座
「唐人お吉伝　らしゃめん」
於：小田原市民会館大ホール
１０月２８日～２９日

劇団麦の会
「Ｄの呼ぶ声」
於：青少年センター多目的プラザ
１１月４日～５日

劇団かに座
「今度は愛妻家」
於：相鉄本多劇場（横浜駅相鉄口）
１１月１０日～１２日

劇団蒼い群
「月光の夏」
於：横須賀市立青少年会館
１１月１１日～１２日

劇団川崎演劇塾
「夏きたりなば」
於：相鉄本多劇場（横浜駅相鉄口）
１１月１７日～１９日

劇団横綱チュチュ
「ＭＡＮＩ ＭＡＮＩ」
於：杉田劇場（ＪＲ新杉田駅）
１１月２４日～２５日

京浜協同劇団
「ミスターチムニー 天空１３０尺の男」
於：スペース京浜（幸区古市場）
１１月２４日～２６日・１２月１日～３日

劇団横浜にゅうくりあ
「横センおやじの旗のもと」
於：青少年センター多目的プラザ
１２月２日～３日

劇団蒼生樹
吉例歳忘れ興行 「あっぱれ狸御殿」
於：杉田劇場（ＪＲ新杉田駅）
１２月１５日～１７日